

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representation of
The original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.**

⑯ 日本国特許庁 (JP) ⑪ 特許出願公開
 ⑫ 公開特許公報 (A) 昭58—162949

⑬ Int. Cl. ³	識別記号	庁内整理番号
G 03 C 7/26		7265—2H
7/34		7265—2H
// C 07 D 257/04		7132—4C
401/12		8214—4C
401/14		8214—4C
403/12		8214—4C
417/12		7431—4C
— 417/14		7431—4C

⑭ 公開 昭和58年(1983)9月27日

発明の数 1
 審査請求 未請求

(全 19 頁)

⑮ ハロゲン化銀カラー写真感光材料

⑯ 特 願 昭57—45809
 ⑰ 出 願 昭57(1982)3月20日
 ⑰ 発明者 仲川敏
 日野市さくら町1番地小西六写
 真工業株式会社内
 ⑰ 発明者 杉田宏
 日野市さくら町1番地小西六写

真工業株式会社内
 ⑰ 発明者 木田修二
 日野市さくら町1番地小西六写
 真工業株式会社内
 ⑰ 出願人 小西六写真工業株式会社
 東京都新宿区西新宿1丁目26番
 2号
 ⑰ 代理人 桑原義美
 最終頁に続く

明細書

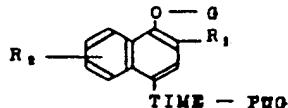
1. 発明の名称

ハロゲン化銀カラー写真感光材料

2. 特許請求の範囲

下記一般式(I)で示される化合物を含有することを特徴とするハロゲン化銀カラー写真感光材料。

一般式(I)



(式中Oは水素または現像時、加水分解もしくは分子内求核置換により、上記一般式(I)で表わされる化合物より離脱しうるプロトキヤンダ基を表わし、R₁はカルボキシ、スルホ、およびヒドロキシから選ばれる基を少なくとも1つを有する炭素数16以下の有機基を表わし、R₂は水素または水溶性酸性基を表わし、TIMEは上記一般式(I)で表わされる化合物が発色現像主葉の酸化体と反応することにより、PUGとともに上記一般式(I)で

表わされる化合物より離脱せしめられ、その後PUGを放出しうるタイミング基を表わし、PUGは写真的に有用な基を表わす。)

3. 発明の詳細な説明

本発明は、写真的に有用な基を調節しうるタイミングで放出することができる1-ナフトールカブラーに関するものであり、更に詳しくは、発色現像主葉の酸化体との反応性が高く、且つ、カップリング反応により生成するシアン色素のアルカリ流出性が良好な1-ナフトールカブラーを含有するハロゲン化銀カラー写真感光材料に関するものである。

写真用途に供せられる化合物を利用して、像様IC写真的に有用な基を放出せしめる手段としては各種の手段が知られている。例えば、Whitmoreらの米国特許第3,148,062号およびBarrらの米国特許第3,227,554号は、写真用カブラーと酸化された発色現像剤との反応によって写真用カブラーのカップリング位置から現像抑制剤または色素を放出せしめることを示している。また、Holts

の米国特許第3,705,801号は、カブラーと酸化された発色現像剤との反応後にカプリング位置から蛋白抑制剤を放出する写真用カブラーを開示している。

上記、先行技術として開示された方法および使用された化合物は、いずれもこれらの化合物から写真的に有用な基を直接的に放出せしめる方式のものに属している。

しかしながら、このような直接的な放出方法は、写真要素内で起る他の素材による種々の反応との関係において、上記せる写真的に有用な基の放出時間を早めたり遅らせたり調整する必要がある場合とか、または、写真要素内の所定の構成層あるいは位置で、その効果を期待したいために、写真的に有用な基を所定の距離だけ移動させる調整が必要である場合などに照しては、その調整が非常に困難である。

従って、従来技術によりこれを改良しようとすれば、写真的に有用な基を放出する成分を選択することが必要であり、またそのような成分に写真

的に有用な基を結合せしめる手段も検討する必要があるほか、写真的に有用な基そのものの選定も熟慮しなければならないなど、幅広い観点からの検討が肝要になるが、しかしながらこのよう調整は前述のような成分あるいは写真的に有用な基に制約されている目的、効果とは矛盾しており、そのため却って所定の目的に関して化合物を選定する自由度を失わせる結果になる。

一方、これに対して、最近写真的に有用な基を間接的に放出せしめる手段が開示されている。これらの方法は、例えば米国特許第4,248,962号に記載されている様に、発色現像主薬の酸化体と反応して、第1段階として写真的に有用な基を伴うタイミング基が放出され次いで第2段階として、タイミング基が分子内求核置換反応を行って、最終目的物である写真的に有用な基を放出せしめたり、特開昭56-114946号に記載されている様に、第2段階として、タイミング基が共役錠に沿った電子移動反応を行って、最終目的物である写真的に有用な基を放出せしめ、これによって写真的に

有用な基による作用効果の時間的調整、あるいは、距離的調整など多くのパラメーターをコントロールするために、広い範囲にわたって調整を可能にしている。この様に写真的に有用な基をタイミング基を介して、写真用カブラーのカプリング位置に置換した化合物は、写真的に有用な基による写真作用効果の出現を種々コントロールできるため、写真的に有用な基を写真用カブラーのカプリング位置に直接置換した化合物よりも、感材設計上極めて有利な化合物である。しかしながらこれらの化合物の多くは写真用カブラーに安定化基を有するため発色現像主薬の酸化体との反応により非アルカリ可溶性の生成物(即ち色素)を像様に生成し、写真要素内に残存するため、通常の非拡散性色画像を利用する感材では色相の異なるカブラー含有層へ使用した場合、色渋りを生じ色再現上好ましくないという重大な欠点を有している。又、発色現像主薬の酸化体との反応により生成する色素像を拡散転写させるようなシステムへの適用が不可能であるという欠点を有している。

一方、カブラー成分として、炭素環状カルボニル化合物の如き、発色現像主薬の酸化体との反応により無色の反応生成物を与える化合物も開示されているが、これらは前述したような感材中の色渋りの問題がなく有利ではあるが、発色現像主薬の酸化体との反応性が悪く、しかも化合物の保存安定性が悪いという欠点を有しており、实用性に乏しいものであった。

従って本発明の第1の目的は、発色現像主薬の酸化体とのカプリング反応性が高く、しかも写真的に有用な基を調節しうるタイミングで放出することのできるシアンカブラーを含有したハロゲン化銀カラー写真感材を提供することである。

本発明の第2の目的は、発色現像主薬の酸化体とのカップリング反応で形成されるシアン色素の流出性が良好なハロゲン化銀カラー写真感材を提供することである。

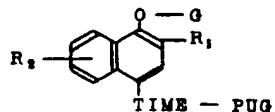
本発明の第3の目的は、色相の異なるカブラーと併用しても、現像処理後に色渋りを起さないハロゲン化銀カラー写真感材を提供することである。

本発明の第4の目的は、経時保存性の良好なハロゲン化銀カラー写真感光材料を提供することである。

本発明の他の目的は、以下の記述から自ずと理解されよう。

本発明者は、観察研究した結果、下記一般式(I)で示される化合物を含有させたハロゲン化銀カラー写真感光材料によって上記諸目的を達成することができた。

一般式(I)



式中、Oは水素または現像時加水分解もしくは分子内求核置換により、上記一般式(I)で表わされる化合物より離脱しうるプロトキヤング基を表わし、R1は、カルボキシ、スルホ、およびヒドロキシから選ばれる基を少なくとも1つを有するカルバモイル基(例えばアルキルカルバモイル基、アリールカルバモイル基、複素環カルバモイル基など)、スルファモイル基(例えばアルキルスルファモイル基、アリールスルファモイル基、複素環スルファモイル基など)、アシル基(例えば、アルキルカルボニル基、アリールカルボニル基、アリールスルボニル基など)、アリール基、あるいは複素環基などがある。

TIMEは上記一般式(I)で表わされる化合物が、染色現像主葉の酸化体と反応することによりPUGとともに上記一般式(I)で表わされる化合物より離脱せしめられ、その後PUGを放出しうるタイミング基を表わし、PUGは写真的に有用な基を表わす。

R1で表わされる炭素数16以下の有機基としては、カルボキシ、スルホおよびヒドロキシから選ばれる基を少なくとも1つを有するカルバモイル基(例えばアルキルカルバモイル基、アリールカルバモイル基、複素環カルバモイル基など)、スルファモイル基(例えばアルキルスルファモイル基、アリールスルファモイル基、複素環スルファモイル基など)、アシル基(例えば、アルキルカルボニル基、アリールカルボニル基、アリールスルボニル基など)、アリール基、あるいは複素環基などがある。

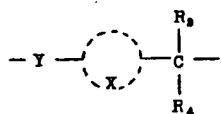
R2で表わされる水溶性酸性基としては、例えばカルボキシ、スルホ、カルボキシアルキル基、スルホアルキル基、カルボキシアルキルアミノ基、

スルホアルキルアミノ基などがある。

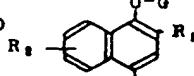
上記タイミング基の一例として、米国特許第4,248,962号、特願昭55-133,537号明細書に開示されている分子内求核置換反応によってPUGを放出するものや、特願昭56-114946号特願昭56-39766号明細書などに開示されている共役錠にそった電子移動反応によってPUGを放出するものなどが挙げられる。

本発明に有用なTIMEとしては次の一般式(II)、(III)、(IV)で示されるものを包含するが、これらに限定されるものではない。

一般式(II)

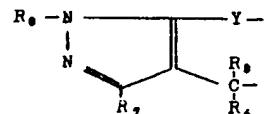


式中、Xは、置換基があつてもよいベンゼン環またはナフタレン環を完成するのに必要な原子群を表わす。Yは-O-、-S-、-N-を表わし、一般式(I)で表わされる化合物の



(以下、1-ナフトールカブラー基と称す。)のカブリング位に結合しており、R1、R2およびR3は水素原子、アルキル基またはアリール基を表わす。また、-C(R3)Y基はYに対し、オルト位またはパラ位に置換されており、PUGに含まれるヘテロ原子に結合している。

一般式(III)



式中Y、R1、R2は各々一般式(II)と同様である。R3は水素原子、アルキル基、アリール基、アシル基、スルホン、アルコキシカルボニル基、複素環残基であり、R4は水素原子、アルキル基、アリール基、複素環残基、アルコキシ基、アミノ基、酸アミド基、スルホンアミド基、カルボキシ、アルコキシカルボニル基、カルバモイル基、シアノを示す。また、このタイミング基は、一般式(II)と同様にYでもって一般式(I)で表わされる1-ナフトールカブラー基のカブリング位に、

R_1
 R_2 基でもって PUG のヘテロ原子に結合する。
次に分子内求核置換反応により PUG を放出する
タイミング基の例を一般式 (IV) で示す。

一般式 (IV)



式中、Nu は電子の豊富な酸素、硫黄又は窒素原子を有している求核基であり、一般式 (I) で表わされる 1-ナフトールカブラー基のカプリング位に結合している。E は、電子の不十分なカルボニル基、テオカルボニル基、ホスフィニル基又はテオホスフィニル基を有している求電子基であり、PUG のヘテロ原子と結合している。X は Nu 及び E を立体的に関係づけていて、一般式 (I) で表わされる 1-ナフトールカブラー基から Nu が放出せしめられた後、3員環ないし 7員環の形成を伴なう分子内求核置換反応を被り、かつそれによって PUG を放出することのできる結合基である。

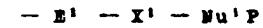
写真的に有用な基 PUG としては、写真要素内において像状パターンで利用可能にされるような基

であるならば、どのような基であってもよい。

写真的に有用な基の具体的な例を挙げると、例えば現像抑制剤、現像促進剤、漂白抑制剤、漂白促進剤、現像剤、定着剤、ハログン化銀溶剤、銀一錯形成剤、被膜剤、タンニング剤、調色剤、カブリ剤、カブリ防止剤、化学または光学増感剤、減感剤、写真用の色素またはそのプレカーラー、カブラー（例えば、競合カブラー、発色カブラー、現像抑制剤—放出カブラー、すなわち DIR—カブラーなど）などがある。

これら写真的に有用な基の中で最も好ましいものは現像抑制剤であり、その代表的な例としては、米国特許第 3,227,554 号、同第 3,384,657 号、同第 3,615,506 号、同第 3,617,291 号、同第 3,733,201 号および英国特許第 1,450,479 号明細書等に記載されているメルカブトテトラゾール基、セレノテトラゾール基、メルカブトベンゾチアゾール基、セレノベンゾチアゾール基、メルカブトベンゾオキサゾール基、セレノベンゾオキサゾール基、メルカブトベンズイミダゾール基、セレノ

ベンズイミダゾール基、ベンゾトリアゾール基、ベンゾジアゾール基および沃素原子などがある。O で表わされるブロッキング基のうち、加水分解により、離脱しうる代表的な基としては、米国特許第 2,575,182 号同第 2,706,685 号、同第 2,865,748 号並びに同第 4,123,281 号等に記載されたアシル基であり、例えば、脂肪族カルボニル基、芳香族カルボニル基、脂肪族スルホニル基、あるいは芳香族スルホニル基が挙げられる。又、分子内求核置換により離脱しうる代表的な基としては、特開昭 55-53330 号に記載されたものが挙げられる。この様な基は次の一般式で表わすことができる。

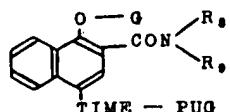


式中、E¹ は親電子基を表わし、Nu¹P はアルカリ条件下で求核基に変換される求核基のプレカーラーを表わし、X¹ は Nu¹P が求核基に変換された後、E¹ と、それが結合している 1-ナフトールカブラーの酸素原子との結合を開裂させる分子内求核置換反応が行りうる様に E¹ と Nu¹P を立体的に関係

づける結合基を表わす。

本発明の目的を達成するために特に好ましい化合物は次の一般式— (V) で示される。

一般式 (V)



式中 G、TIME ならびに PUG は一般式 (I) と同様である。R₁ は水素または炭素数が 4 以下のアルキル基（例えばメチル、エチル、ブチルなど）を表わし、R₂ は炭素数 12 以下、より好ましくは 8 以下のカルボキシアルキル基、スルホアルキル基あるいはヒドロキシアルキル基（例えば、カルボキシメチル、スルホメチル、カルボキシエチル、スルホエチル、ヒドロキシエチル、スルホ-2-メチルプロピル、スルホ-2,2-ジメチルプロピル、スルホブチル、カルボキシブチル、スルホ-4-エチルブチル、スルホベンチル、4-カルボキシメトキシベンジルなど）、および少なくとも 1 個以上のカルボキシ、スルホ、あるいはヒドロキシ

を直接、または炭素数1～4のアルキレン基（例えば- CO -、- CONH -、- SO₂ NH -、- NHCO -、- NHSO₂ -、あるいは- O -を介してもよいメテレン、エチレン、ブチレンなど）あるいはフェニレン基を介して有するフェニル基、ナフチル基、あるいは5員もしくは6員の複素環基（例えばフリル基、ピリジル基、チアゾリル基など）を表わす。このフェニル基、ナフチル基、あるいは5員もしくは6員の複素環基は更にハロゲン原子（例えば塩素、臭素、沃素など）、ニトロ、シアノ、炭素数1～4のアルキル基（例えばメチル、エチル、プロピル、イソブロピル、ブチルなど）、炭素数1～4のアルコキシ基（例えばメトキシ、エトキシ、ブトキシなど）、炭素数1～4のアルキルアミノ基（例えばメチルアミノ、ジメチルアミノ、エチルアミノなど）などによって置換されていてもよい。

またR₁とR₂とでカルボキシ、スルホ、あるいはヒドロキシを有する含窒素5員環、6員環を形成してもよい。

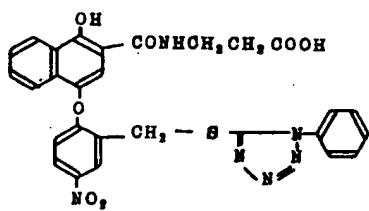
これまでの記述で明らかな様に、本発明の化合物は、発色現象主葉の酸化体との反応性を高めつつ、しかもその反応生成物（即ちシアン色素）をアルカリ可溶性とし、写真要素からの流出性が付与されている。このことにより、本発明の化合物は、その適用範囲が従来にも増して拡大し、例えば使用量の増加など感光設計上、きわめて有利なものとなった。また、カプラー成分として米国特許第2,979,405号、英国特許第975,939号に記載されている1-ナフトールカプラーの如く、水溶性基とともに安定化基を含有する場合、発色現象主葉の酸化体との反応生成物（即ちシアン色素）は、写真要素中に残存するため、本発明の目的を達成しえないことは、自ずと理解されよう。

以下に本発明の化合物の具体的な代表例を示すが、本発明の化合物は、これらに限定されるものではない。

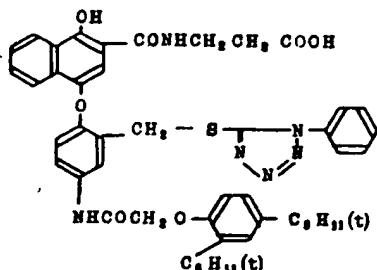
以下発白

(例示化合物)

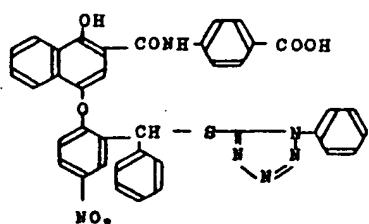
1



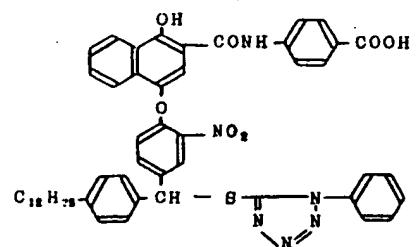
2



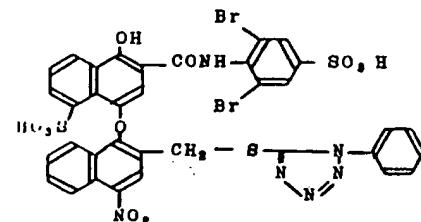
3



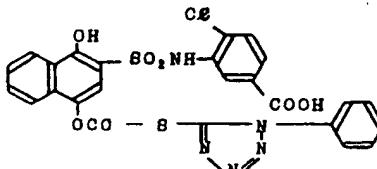
4



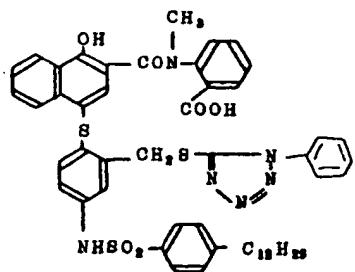
5



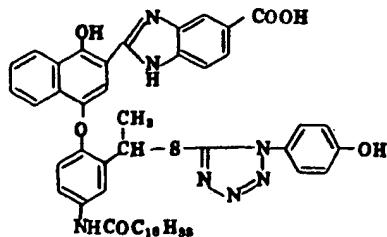
6



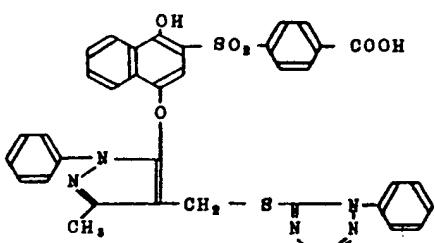
7



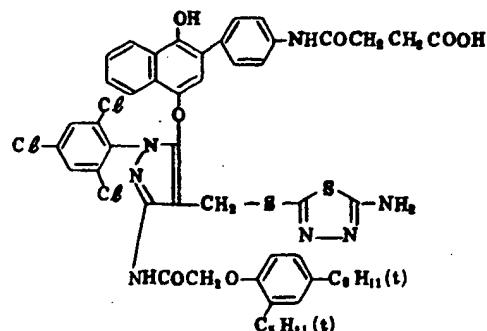
9



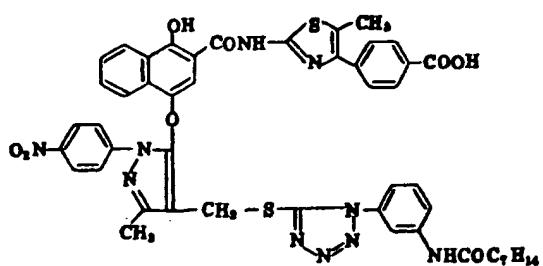
8



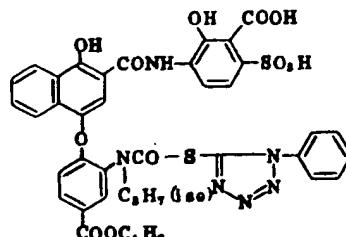
10



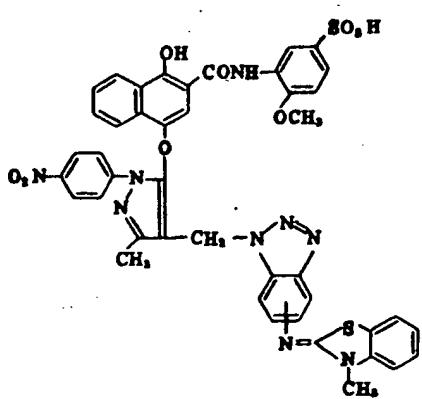
11



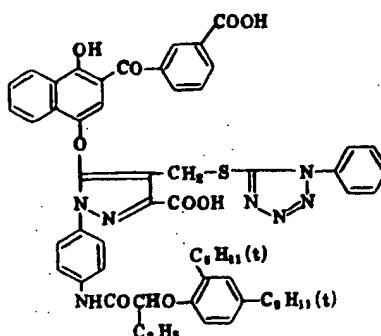
13



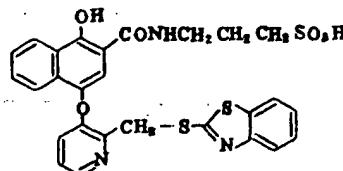
12



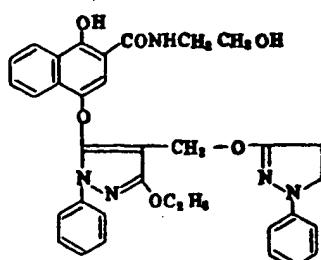
14



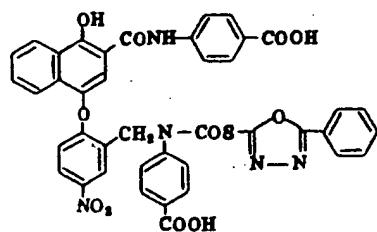
15



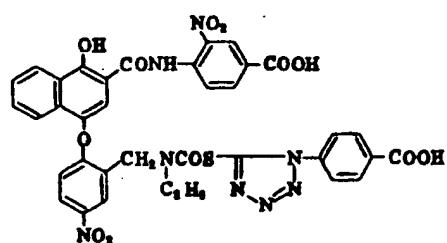
16



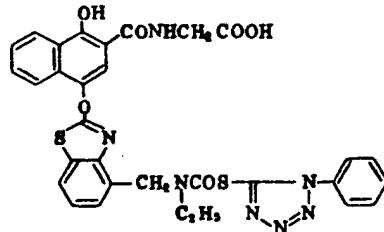
19



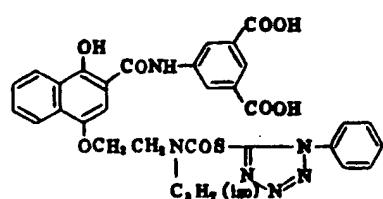
17



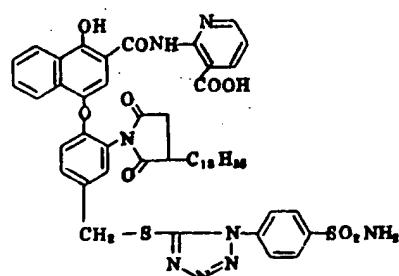
20



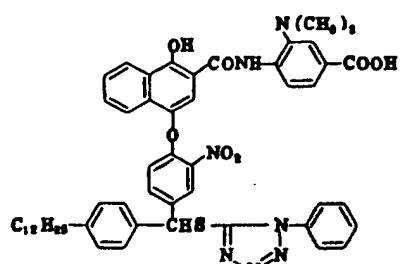
18



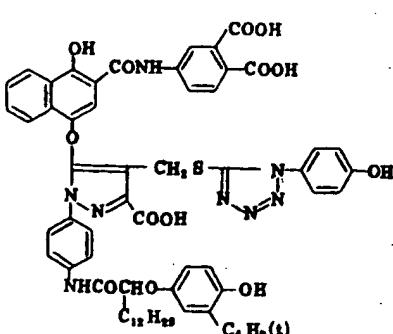
21



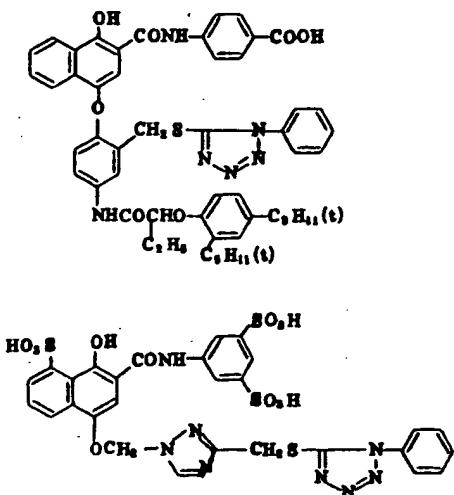
22



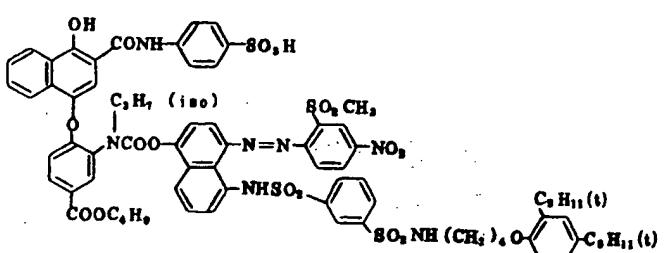
23



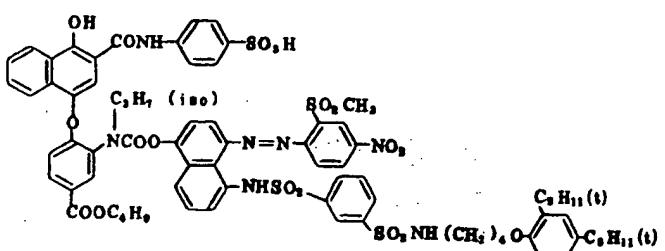
24



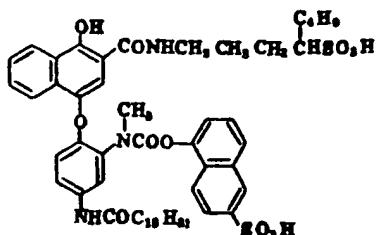
25



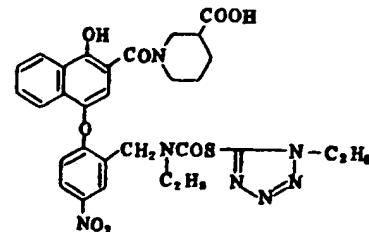
26



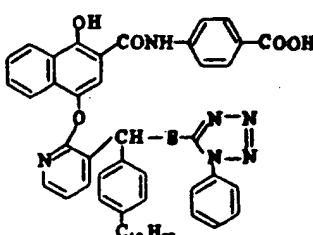
27



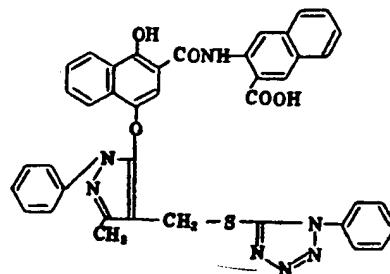
30



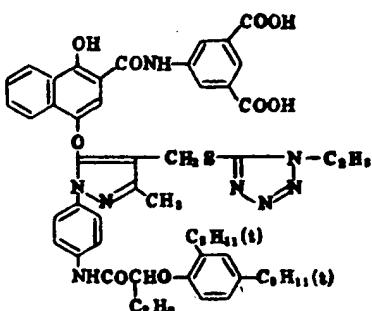
28



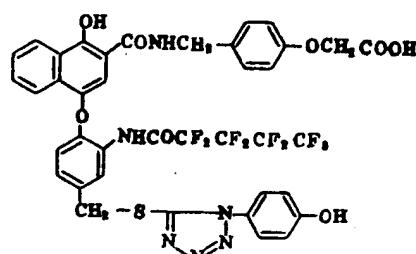
31



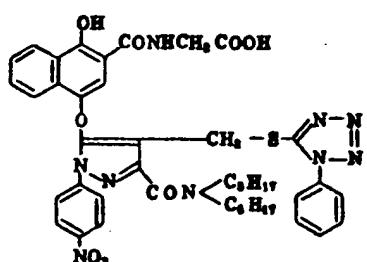
29



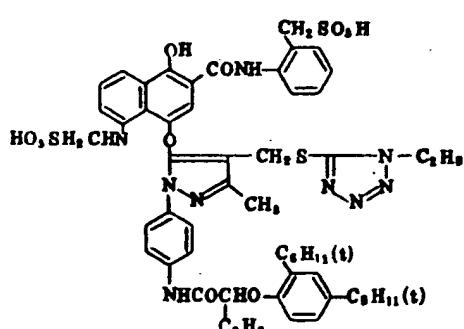
32



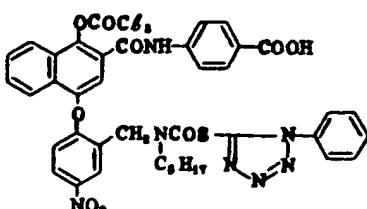
33



36

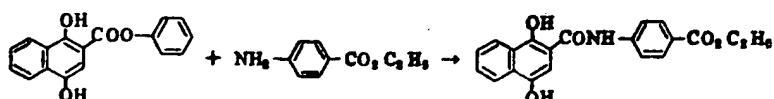


34

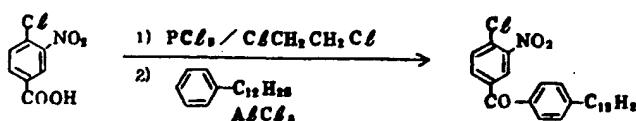
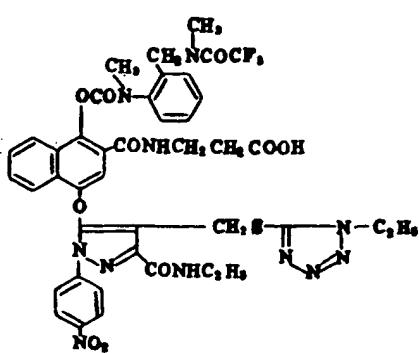


合成例 1

例示化合物 4 の合成

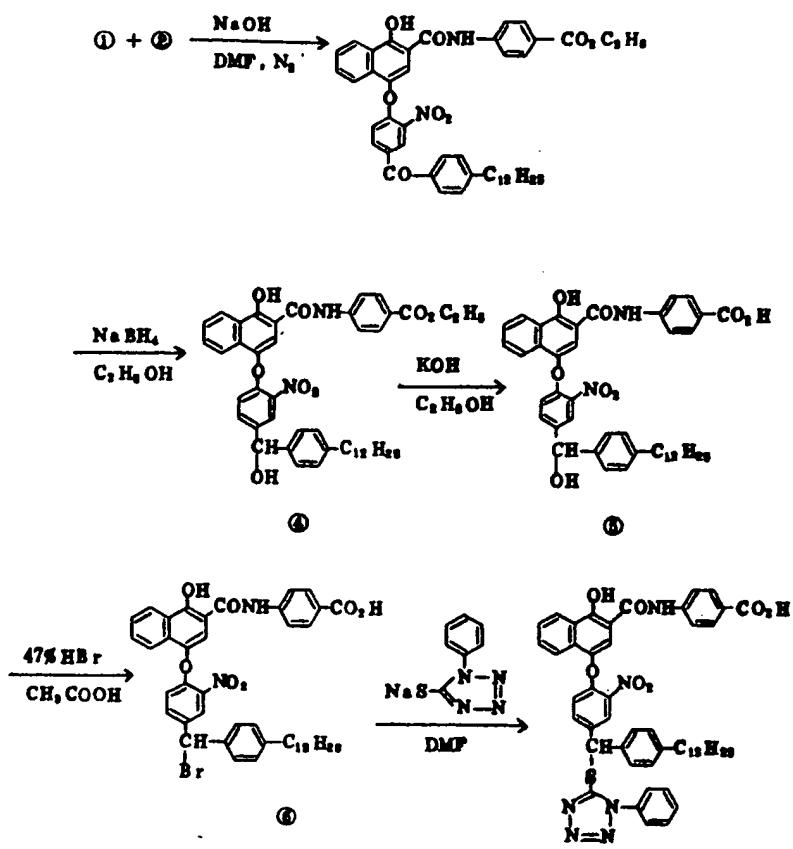


35



①

②



(例示化合物 4)

1) ①の合成

1,4-ジヒドロキシナフトエ酸フェニルエステル 42.0 g とベラアミノ安息香酸エチルエステル 24.7 g を 100 mL フラスコ中に入れ、フラスコ内をアスピレーターで吸引しつつ、150 ~ 160 °C で 2 時間反応させた。生成した固体を 40% KOH 中で粉砕し、濾過すると黄色固体①が 22.5 g 得られた。

2) ②の合成

4-クロロ-3-ニトロ安息香酸 30.2 g を 1,2-ジクロロエタン 50 mL に懸濁し、五塩化リン 34.5 g を徐々に加えた。2 時間還流させた後、室温まで冷却し、ドデシルベンゼン 37.0 g を加えた。これに塩化アルミニウム 30.2 g を徐々に加え、2 時間還流した。反応溶液を氷水 500 mL 中にあけ、クロロホルムを加えて有機層を抽出した。この有機層をまず希塩酸溶液、ついで水酸化ナトリウム溶液で洗浄した後、濾過すると、黒褐色液体②が 58.5 g 得られた。

3) ③の合成

①の 22.5 g と ②の 34.3 g をジメチルホルムアミド 200 mL に溶解し、反応器中に窒素を通しながら、水酸化ナトリウム 5.3 g を水 15 mL に溶かしたものと加え、30 分反応させた。反応溶液を 36% 塩酸 10 mL を含む氷水 1 L 中に投入すると固体が生成した。固体を濾過し、これをベンゼン-ヘキサンから再結晶して③の 29.2 g を得た。

4) ④の合成

③の 25 g をエチルアルコール 100 mL に溶解し、水酸化ホウ素ナトリウム 1.5 g を徐々に加え、30 分攪拌した後、36% 塩酸 10 mL を含む氷水 500 mL 中に投入すると固体が析出した。これを濾集し、水洗した後、乾燥した。④が 25 g 得られた。

5) ⑤の合成

④ 25 g をエチルアルコール 100 mL に溶解し、これに水酸化カリウム 11 g を水 20 mL に溶かしたものと加え、5 時間攪拌した後、36% 塩酸 10 mL を含む氷水 500 mL に投入した。析出した固体を濾集し、水洗した後、乾燥した。⑤が 22.5 g 得

以下由

られた。

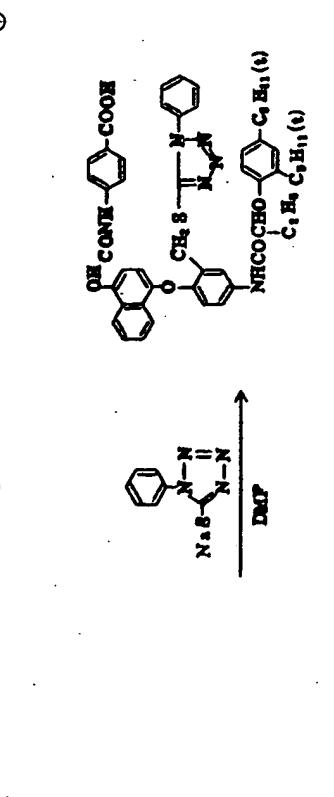
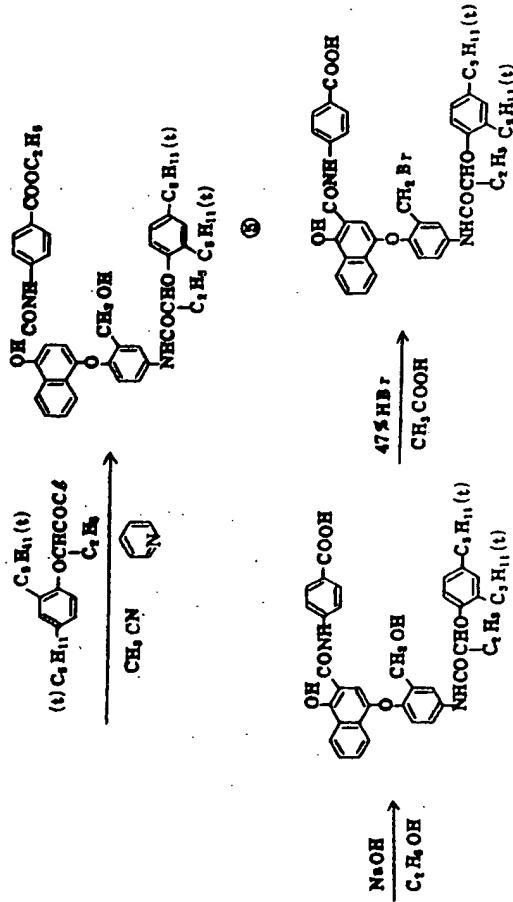
6) ⑥の合成

⑤ 22.5 g を酢酸 200 mL を加え、70°C に加温し、溶解させた。これに 47% 奥化水素酸 13.4 g を酢酸 15 mL と混合したものを徐々に滴下した。75°C で 2 時間攪拌した。反応中析出した固体を濾集し、酢酸でよく洗った後、ヘキサンで洗い、乾燥した。⑥が 20.3 g 得られた。

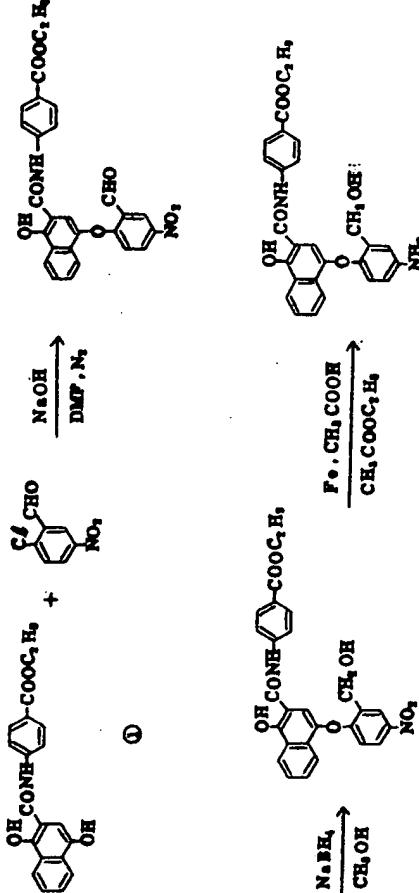
7) 例示化合物 4 の合成

⑥ 20.3 g と 1-フェニル-5-メルカプトテトラゾールのナトリウム塩 5.2 g をジメチルホルムアミド 100 mL に溶解させ、1 時間還流した後、冰水 500 mL 中にあけた。得られた固体を濾集し、水洗した後乾燥した。これを酢酸エチル-ヘキサンから再結晶し、例示化合物 4 が 23 g 得られた。融点 176 ~ 178°C (分解) このものは、元素分析および NMR, FD - Mass より、例示化合物 4 と同定した。

以 下 空 白

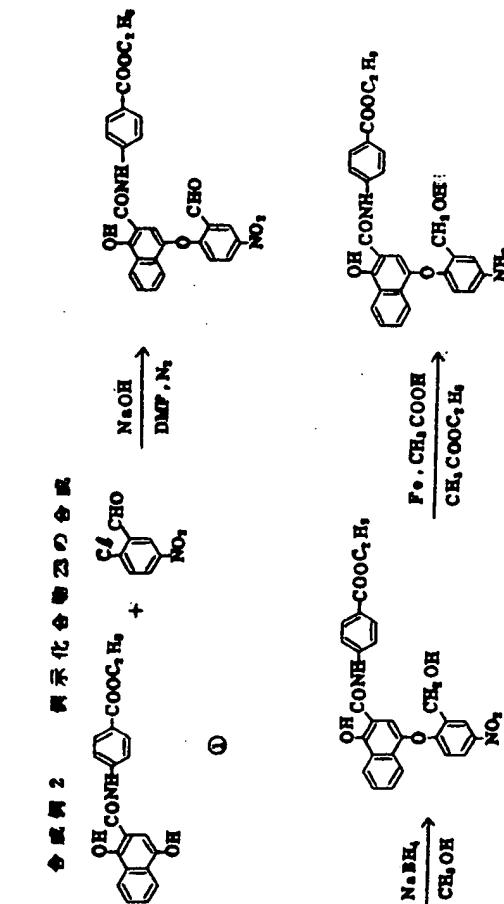


合成例 2 例示化合物 23 の合成



以 下 空 白

(例示化合物 23)



以 下 空 白

1) ②の合成

① 36 g と 2-クロロ-5-ニトロベンツアルデヒド 19 g をジメチルホルムアミド 300 ml に溶解し、反応容器中に窒素を通しながらこれに水酸化ナトリウム 8.2 g を水 40 ml に溶かしたものと加え、室温下 1 時間反応させた。この反応溶液を 36% 塩酸 20 ml を含む氷水 2 l 中に投入すると固体が生成した。固体を滤過し、水洗を行う。これを酢酸エチル 300 ml につぶして煮沸を行い冷却後滤取すると 39 g の②を得た。

2) ③の合成

② 39 g をメタノール 400 ml に溶解し、これに水酸化ホウ素ナトリウム 7.4 g を徐々に加え、30 分搅拌を行う。この反応溶液を 36% 塩酸 30 ml を含む氷水 1.5 l 中に投入すると固体が生成した。固体を滤過し、水洗を行う。これをメタノール 400 ml とアセトン 100 ml の混合溶液で煮沸を行い、冷却後滤取すると 36 g の③を得た。

3) ④の合成

③ 15 g 、酢酸エチル 400 ml 、酢酸 200 ml 、水 40

ml の混合物を煮沸搅拌し、これに水酸化ナトリウム 1.6 g を加え、1 時間煮沸搅拌する。これを酢酸エチル 30 ml で再结晶を行い、5.5 g の④を得た。

6) ⑦の合成

⑥ 5.5 g 、酢酸 80 ml の混合物を 70 ℃ に加熱し、これに 47% 呂化水素 3.9 ml を 15 分で滴下する。その後 1 時間、70 ℃ で加熱搅拌を行い、反応混合物を 500 ml の氷水に投入し、析出する固体を滤過水洗を行い乾燥する。これを、酢酸エチル 100 ml で再结晶を行い 4.9 g の⑦を得た。

7) 例示化合物 23 の合成

⑦ 3.5 g と 1-フェニル-5-メルカブドテトラゾールの Na 塩 1.6 g を 30 ml のジメチルホルムアミドに溶解し、8 時間攪拌で加熱する。この反応溶液を 200 ml の氷水に投入し、析出する固体を滤過、水洗し乾燥する。これを 40 ml の酢酸エチルで再结晶を行い 3.1 g の例示化合物 23 が得られた。融点 215 ~ 218 ℃ (分解)

このものは元素分析および、NMR、FD-Mass に

該の混合物を煮沸搅拌し、これに還元鉄 16 g を加え 30 分搅拌する。これを熱時、吸引濃過を行い、残渣 100 ml の酢酸エチルで洗浄する。得られた反応液を炭酸水素ナトリウムで中和し、次いで酢酸エチル溶液を炭酸ナトリウムで乾燥する。酢酸エチルを減圧下留去し、得られた油状物に 50 ml のベンゼンを加え加熱すると結晶化する。これを滤取し、100 ml の酢酸エチルで再結晶を行うと 6.7 g の④を得た。

4) ⑤の合成

④ 6.7 g 、ビリジン 1.13 g 、アセトニトリル 300 ml の混合物に 2-(2,4-ジ-tert-アミルフェノキシ)-ブチリルクロライド 4.9 g を加え 1 時間煮沸搅拌する。この反応混合物を 1.6 l の氷水に投入し、析出する固体を滤過、水洗を行い、乾燥する。これをメタノール 20 ml と酢酸エチル 20 ml の混合溶液で再結晶を行い、7.4 g の⑤を得た。

5) ⑥の合成

⑤ 6 g 、エタノール 100 ml の混合物に 1.6 g の水酸化ナトリウムを加え、1 時間煮沸搅拌する。こ

より例示化合物 23 と同定した。

本発明に係る化合物をハロゲン化銀カラーラジオ感光材料に用いる際には、PUG の種類により種々の種類が考えられるが、本発明に係る化合物に対する従来技術に適用されている方法と同様の方法を用いることができる。

本発明において PUG は現像抑制剤が特に好ましく、以下 PUG が現像抑制剤の場合について詳細に説明するが、本発明はこれによって限定されるものではない。

本発明の化合物は、カラーレスカブラー・カラードカブラーと併用し、カブラーと同一乳化物としてハロゲン化銀乳剤層中に添加することもできるし、あるいは独立の乳化物として中間層等の補助層に添加することもできる。本発明の化合物は単独で又は 2 種以上併用して用いることができる。そして上記本発明の化合物をハロゲン化銀乳剤層に添加する場合の添加量としてはハロゲン化銀 1 モルに対して本発明の化合物 0.01 ~ 200 モル量の範囲であり、好ましくは 0.05 ~ 50 モル量程度で

ある。

本発明による化合物は、種々のハロゲン化銀写真感光材料に用いることができ、例えば白黒用、カラー用、複カラー用等のいずれにも有用でまた一般白黒用、印刷用白黒、エレイ用、電子顕用、高解像力用白黒、一般カラー用、カラーエレイ用、拡散転写型カラー用等種々の用途のハロゲン化銀写真感光材料に適用することができる。

本発明に係る化合物をハロゲン化銀カラー用写真感光材料に適用する場合、公知の2当量、4当量カプラーと併用して使用できる。本発明において使用されるイエローカプラーとしては、開鎖ケトメチレン化合物、例えばビバリルアセトアニリド型、ベンゾイルアセトアニリド型イエローカプラーが用いられる。

また、マゼンタカプラーとしてはピラゾロン系、ピラゾロトリアゾール系、ピラゾリノベンツイミダゾール系、インダゾロン系等の化合物が用いられる。

マスキングカプラーとしてのカーラード・マゼン

タ・カブラーとしては、一般的にはカラーレス・マゼンタ・カブラーの活性点にアリールアゾ基を置換した化合物が用いられる。

更に発色現像主葉の酸化生成物との反応で色葉が処理浴中に流出していくタイプのカーラード・マゼンタ・カブラーも用いることができる。

また、シアンカブラーとしては一般にフェノールまたはナフトール誘導体が用いられる。

上記マスキング・カブラーとしてのカーラード・シアン・カブラーとしては、カラーレス・シアン・カブラーの活性点にアリール・アゾ基を置換した化合物が一般的に用いられる。更に発色現像主葉の酸化生成物との反応で色葉が処理浴中に流出していくタイプのカーラード・シアン・カブラーも用いることができる。

また、本発明の写真感光材料には写真特性を向上するために、所謂コンビーティング・カブラーと呼ばれる無色色葉を形成するカブラーを含むこともできる。

本発明に用いられるカブラーとしては、開鎖

53-144727号明細書第68~80頁に記載の2当量カブラー及び同第109頁~115頁に記載の4当量カブラーもしくはカーラードカブラーが好ましい。

本発明に係る化合物を含む乳剤層または非感光性親水性コロイド層には、還元剤または酸化防止剤、例えば亜硫酸塩(亜硫酸ナトリウム、亜硫酸カリウム等)、重亜硫酸塩(重亜硫酸ナトリウム、重亜硫酸カリウム等)、ヒドロキシルアミン類(ヒドロキシルアミン、N-メチルヒドロキシルアミン、N-フェニルヒドロキシルアミン等)、スルフィン酸類(フェニルスルフィン酸ナトリウム等)、ヒドラジン類(N,N'-ジメチルヒドラジン等)、レダクトン類(アスコルビン酸等)、ヒドロキシル基を1つ以上有する芳香族炭化水素類(p-アミノフェノール、アルキルハイドロキノン、没食子酸、カテコール、ピロガロール、レゾルシン、2,3-ジヒドロキシナフタレン等)などを併用することができる。

更に、本発明において使用されるマゼンタカブラーから形成されるマゼンタ色画像の光吸收性を

更に向上させるために、該乳剤層もしくは、その隣接層内にオーフルコキシフェノール類、フェノール性化合物類を添加することができる。

本発明の感光材料の層構成については、通常の被色法で良く原則的には、青感性感光層中に黄色色葉を形成するためのイエローカブラーを、緑感性感光層中にマゼンタ色葉を形成するためのマゼンタカブラーを、及び赤感性感光層中にシアン色葉を形成するためのシアンカブラーを、それぞれ含有している三層が基本的な層構成であり、更に、これら各層のいずれか、あるいは全層を二重あるいは三重層等重層にして、感光材料の発色性、色再現性、発色色葉形状性等の写真特性を改良することができる。

これら基本的な乳剤層の他に、最上層に保護層、層間には中間層、フィルター層、最下層には下引き層、ヘーレーション防止層等の各層が適切に用いられて、保護、色汚染防止、粒状性向上、色再現向上、層付向上等を計ることができる。

本発明の感光材料に用いられるハロゲン化銀と

しては塩化銀、臭化銀、沃化銀、塩臭化銀、沃臭化銀、塩沃臭化銀等の通常のハロゲン化銀写真感光材料に使用される任意のハロゲン化銀が包含される。

上記のハロゲン化銀乳剤は、公知の化学増感剤により増感することができる。化学増感剤としては貴金属増感剤、硫酸増感剤、セレン増感剤及び還元増感剤の単独または併用ができる。

ハロゲン化銀用バインダーとして公知のバインダーが使用される。更に本発明のハロゲン化銀乳剤は、必要に応じて公知の増感色素を用いて分光増感することができる。

上記のハロゲン化銀乳剤には感光材料の製造工程、保存中あるいは処理中の感度低下やカブリの発生のために、1-フェニル-5-メルカブトテトラゾール、3-メチルベンゾチアゾール、4-ヒドロキシ-6-メチル-1,3,3a,7-テトラアザインデン等の複素環化合物、メルカブト化合物、金属塩類等の種々の化合物を添加することができる。

—アミノ—N—エチル—N— β —ヒドロキシエチルアニリン、3-メチル-4-アミノ—N—エチル—N— β —ヒドロキシエチルアニリン、3-メチル-4-アミノ—N—エチル—N— β —メタンスルホンアミドエチルアニリン、3-メチル-4-アミノ—N—エチル—N— β —メトキシエチル-4-アミノ—N,N—ジエチルアニリン、3-メトキシ-4-アミノ—N—エチル—N— β —ヒドロキシエチルアニリン、3-メトキシ-4-アミノ—N—エチル—N— β —メトキシエチルアニリン、3-アセトアミド-4-アミノ—N,N—ジエチルアニリン、4-アミノ—N,N—ジメチルアニリン、N—エチル—N— β —[β —(メトキシエトキシ)エトキシ]エチル-3-メチル-4-アミノアニリン、N—エチル—N— β —(メトキシエトキシ)エチル、3-メチル-4-アミノアニリンや、これらの塩、例えば硫酸塩、塩酸塩、亜硫酸塩、p-トルエンスルホン酸塩等である。また、これらの発色現像液には必要に応じて種々の添加剤を加えることができる。

また、上記乳剤の硬膜処理は、常法に従って実施される。

上記ハロゲン化銀乳剤には、界面活性剤を単独もしくは混合して添加してもよい。この界面活性剤としては塗布助剤、乳化剤、処理液等に対する浸透性の改良剤、消泡剤、荷電防止剤、耐候着剤、写真特性の改良あるいは物理的性質のコントロールのための各種の活性剤が使用できる。

本発明の感光材料の処理に用いられる発色現像主薬は、現像主薬を含むpHが8以上、好ましくはpHが9~12のアルカリ性水溶液である。この現像主薬としての芳香族第1級アミン現像主薬は芳香族環上に第1級アミノ基を持ち、露光されたハロゲン化銀を現像する能力のある化合物、または、このような化合物を形成する前駆体を意味する。

上記現像主薬としては、4-フェニレンジアミン系のものが代表的であり、次のものが好ましい例として挙げられる。

4-アミノ—N,N—ジエチルアニリン、3-メチル-4-アミノ—N,N—ジエチルアニリン、4-

本発明に係る上記カラー感光材料を像板露光し、発色現像処理後、常法により漂白処理を行なうことができる。この処理は定着と同時に、また別個でもよい。この処理液は必要に応じて定着剤を加えることにより漂白定着液とすることもできる。漂白剤としては種々の化合物が用いられ、漂白促進剤をはじめ、種々の添加剤を加えることもできる。

本発明は、種々の形態のカラー感光材料において実現される。その1つは支持体上に耐塩酸性カブラーを含有するハロゲン化銀乳剤層を持つ写真感光材料を芳香族第1級アミン系発色現像主薬を含むアルカリ性現像液で処理して水不溶性ないしは耐塩酸性色素を乳剤層中に残すことである。他の1つの形態では支持体上に耐塩酸性カブラーと組ったハロゲン化銀乳剤層を持つ写真感光材料を芳香族第1級アミン系発色現像主薬を含むアルカリ性現像液で処理して水性樹脂に可溶にして塩酸性の色素を生成せしめ、他の親水性コロイドよりなる受像層に転写せしめる。即ち、塩酸転写カ

ラー方式である。

本発明の上記感光 料は、カラー・ネガティブフィルム、カラー・ポジティブフィルム、カラー・反転フィルム、カラー・ペーパー あらゆる種類のカラー感光材料を包含する。

次に本発明を実施例により具体的に説明するがこれにより本発明の実施の趣模が何ら限定されるものではない。

実施例-1

下引加工したセルローストリアセテート・フィルム支持体上にイエローカブラーとして下記構造の化合物20gをトリクロレジルフオスフェート20mlと酢酸エチル60mlに溶解しこれをアルカノールB(アルキルナフタレンスルホネート デュポン社製)の5%水溶液20mlを含む5%セラチン水溶液200mlと混合しコロイドミルにかけて乳化分散し乳化物を得た。この分散液を青感性沃具化銀乳剤(6モル%沃化銀含有)1kgに添加し、硬膜剤として1,2-ビス(ビニルスルホニル)エタンの2%水溶液40mlを加え造布乾燥した。(造布銀量20

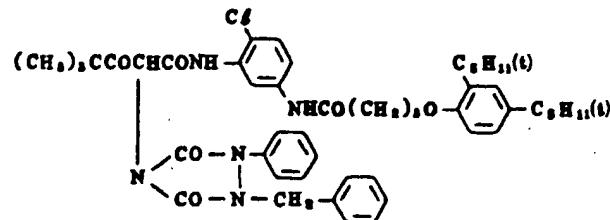
mg / dm²、カブラーモル / Agモル = 0.1)

このようにして得られたハロゲン化銀カラー写真感光材料を試料(I)とする。

試料(I)の乳化分散物中へ、本発明の例示化合物(2)及び(3)を添加し、試料(I)と同様に調整し造布乾燥した試料を(2)及び(3)とする。

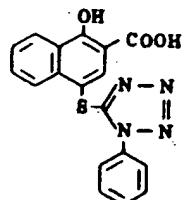
試料(I)の乳化分散物中へ下記の比較化合物(A)、(B)、(C)を添加し、試料(I)と同様に調整し造布乾燥した試料を(4)、(5)、(6)とする。

イエローカブラー



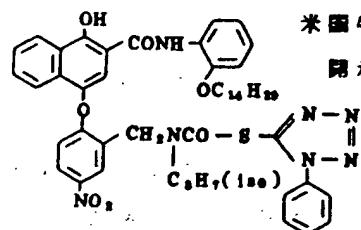
イエローカブラー

比較 DIR カブラー (A)



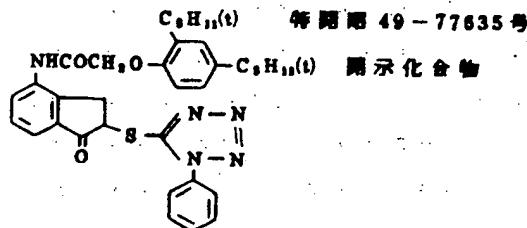
米国特許第3,227,554号
開示化合物

比較 DIR カブラー (B)



米国特許第4,248,962号
開示化合物

比較 DIR 化合物 (C)



等開昭49-77635号
開示化合物

これらの各試料をインテンシティースケール感光計でウェッジ露光を与えた後、下記の処理工程に従って発色現像処理を行なって表-1の結果を得た。

[処理工程]	(38°C)	処理時間
発色現像		3分15秒
漂白		6分30秒
水洗		3分15秒
定着		6分30秒
水洗		3分15秒
安定浴		1分30秒

各処理工程において使用した処理工程は、下記の如くであった。

[発色現像液組成]

4-アミノ-3-メチル-N-エチル-	
N-(β-ヒドロキシエチル)-アニリン	
硫酸塩	4.75 g
無水亜硫酸ナトリウム	4.25 g
ヒドロキシアミン水硫酸塩	2.0 g
無水炭酸カリウム	37.5 g

臭化ナトリウム	1.3	g
ニトリロトリ酢酸 3 ナトリウム塩 (1水塩)	2.5	g
水酸化カリウム	1.0	g
水を加えて1.6とし、水酸化カリウムを用いてpH 10.0に調整する。		

〔漂白液組成〕

エチレンジアミンテトラ酢酸鉄		
アンモニウム塩	100.0	g
エチレンジアミンテトラ酢酸 2		
アンモニウム塩	10.0	g
臭化アンモニウム	150.0	g
冰酢酸	10.0	ml
水を加えて1.6とし、アンモニア水を用いてpH 6.0に調整する。		

〔定着液組成〕

チオ硫酸アンモニウム (50%水溶液)	162	ml
無水亜硫酸ナトリウム	12.4	g
水を加えて1.6とし、酢酸を用いて		

表-1より本発明のDIRカプラーは、従来の比較化合物に比して少量の添加量でガンマ-調節が可能であり、生成するシアン色素による色渕りがなく良好であることが理解される。

次に同じ試料を60°C、80%RH中へ3日間保存後、同時に露光を与えて同様の現像処理を行った結果を表-2に示す。尚、感度の値は未処理の試料(1)を100とした時の相対値で示した。

表-2

試料 No	化合物	DIR添加量 (モル/Agモル×100)	S	T _g	Fog
1	対照	—	97	2.00	0.16
2	例示化合物2	0.3	83	0.75	0.09
3	例示化合物5	0.3	82	0.73	0.08
4	比較化合物A	2.0	56	0.60	0.05
5	比較化合物B	0.5	83	0.77	0.08
6	比較化合物C	1.0	40	0.50	0.05

pH 6.5に調整する。

〔安定化液組成〕

ホルマリン(37%水溶液)	5.0	ml
コニダックス (小西六寧真工業株式会社)	7.5	ml
水を加えて1.6とする。		

尚、表-1の感度値は試料(1)の感度を100とした時の相対感度値で示した。又色渕り値についてはBlue感度が1.0を与えた時のRed感度の百分率値で示した。

表-1

試料 No	化合物	DIR添加量 (モル/Agモル×100)	S	T _g	Fog	色渕り (%)
1	対照	—	100	2.05	0.15	5
2	例示化合物2	0.3	85	0.80	0.08	5
3	例示化合物5	0.3	82	0.76	0.07	5
4	比較化合物A	2.0	73	0.77	0.07	6
5	比較化合物B	0.5	85	0.80	0.08	12
6	比較化合物C	1.0	77	0.76	0.07	6

表-2より比較化合物A及びCは60°C、80%RH中3日で著しく感度が低下するが、本発明の化合物及び比較化合物BとDはこのような保存条件にも、ほとんど変化が無く極めて安定なことが判る。

実施例-2

ハレーション防止層を有するトリアセテートフィルムベース上にマゼンタカプラーとして下記化合物15gをトリクロルメタノン15gと酢酸エチル45mlで溶解し、実施例-1と同様に乳化物を得た。この分散液を感光性沃化銀乳剤(6モル%沃化銀含有)1kgに添加し実施例-1と同様に硬膜剤を添加し塗布乾燥した。

こうして得られたハログン化銀カラー写真感光材料を試料(7)とする。試料(7)の乳化分散物中に本発明の例示化合物(19)及び(20)を添加したものと試料(18)及び(19)とする。試料(7)の乳化分散物に比較化合物(1)、(4)、(5)を添加し試料(7)と同様に調製し塗布乾燥した試料を(10)、(11)、(12)とする。

以上の試料に実施例-1と同様に露光処理を施

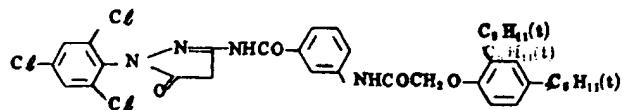
した結果を表-3に示す。

表-3

試料 No.	化合物	添加量 (モル/Agモル)×100	S	T ₁	F _{og}	色調り (%)
7	対照	—	100	2.10	0.17	12
8	例示化合物 19	0.5	82	0.75	0.10	12
9	例示化合物 30	0.3	83	0.78	0.09	12
10	比較化合物 D	3.0	70	0.72	0.10	13
11	比較化合物 E	0.6	80	0.73	0.10	20
12	比較化合物 F	0.6	82	0.74	0.10	21

尚表-3中の色調り値はGreen濃度が1.0の時のRed濃度の百分率値で示した。

マゼンタカブラー



比較化合物-D

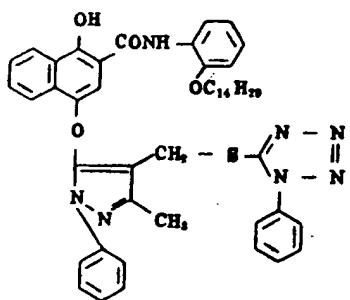
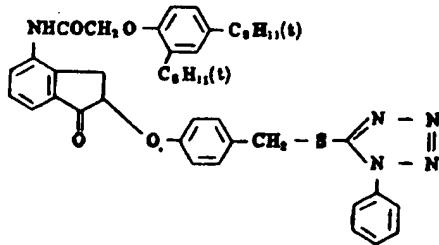


表-3より本発明の化合物は比較化合物(D)(F)に対し少量添加で階調コントロールが可能であり、比較化合物(D)及び(F)は色調りが大きいが本発明化合物は色調りがなく良好であることが判る。

次に同じ試料を実施例-1と同様に60℃80%RH中へ3日間保存後、実施例-1と同様に露光処理を行った結果を第4表に示す。尚表中の濃度は未処理の試料(D)を100とした時の相対濃度値で示した。

以白

比較化合物-D(特開昭56-114946号開示化合物)



比較化合物-E(特開昭56-114946号開示化合物)

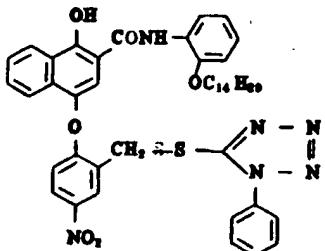


表-4

試料 No.	化合物	添加量 (モル/Agモル)×100	S	T ₁	F _{og}
7	対照	—	92	2.00	0.19
8	例示化合物 19	0.5	80	0.73	0.10
9	例示化合物 30	0.3	80	0.75	0.09
10	比較化合物 D	3.0	72	0.70	0.09
11	比較化合物 E	0.6	78	0.72	0.11
12	比較化合物 F	0.6	78	0.72	0.11

表-4より本発明の化合物は60℃80%RH保存でも安定であることがわかる。

次に上記で得られた試料7~12を緑色光でウニッジ露光し、実施例-1と同様の現像処理を行ない、これを緑色光にて色像の粒状性をRMS(roots mean square)法で測定した。濃度0.7に於けるRMS粒状度の結果を第5表に示した。

一方、試料7~12に空間周波数が3本/mmから

表-5

試料 番 号	化 物	添加量 (モル/A _g モル)×100	T _g	RMS	MTF (S)	
					10本/mm	30本/mm
7	対照	—	1.80	78	100	65
8	表示化合物 19	0.5	0.73	40	121	98
9	表示化合物 30	0.3	0.72	41	118	100
10	比較化合物 E	3.0	0.68	48	102	70
11	比較化合物 F	0.6	0.70	48	115	95
12	比較化合物 G	0.6	0.71	46	114	96

表-5より各試料が各々同一の階層を得た時、本発明の化合物は比較化合物に比べ粒状性、盤状性共優れてることが判る。

以下(3)白
表示化合物

100本/mmまでの範囲で変化させたウェッジを介して赤色光で露光し、実施例-1と同様の方法で現像処理し、得られた色像を色光にてMTF (Modulation Transfer Function)を求め、空間周波数が10本/mmおよび30本/mmでのMTFの値を比較し、盤状性の改良効果を調べた結果を表-5に示した。

RMS値は、円形走査口径が25μのミクロテンシトメーターで走査した時に生ずる濃度値の変動の標準偏差の1000倍値を記入した。

MTF値は、スリット巾が縦300μ、横2μの巾のスリッターで濃度測定を行ない入力に対する解像力を百分率値で示した。

以下(3)白
表示化合物

実施例-3

透明なトリアセテートフィルムベース上に下記の順序で重層塗布を行なって、下記の試料13~17を作成した。

第1層：赤感性乳剤層

シアシカブラーとして、1-ヒドロキシ-N-[4-(2,4-ジ-tert-アミルフェノキシ)ブチル]-2-ナフトアミド10.6gをトリタレジルフォスフェート11mlと酢酸エチル30mlに溶解し、実施例-1と同様に乳化物を得た。

しかるのち、この分散液を赤感性汎臭化銀乳剤(6モル%の汎臭化銀を含有)1kgに添加し、硬膜剤として、1,2-ビス-(ビニルスルホニル)エタンの2%溶液(水とメタノールの混合比は1対1)40mlを加え、塗布乾燥した。この時の塗布重量は20mg/4gで、又カブラーモル/A_gモル=0.1であった。

第2層：中間層

セラチン0.5g/4gおよび2,5-ジ-tert-オクタルハイドロキノン0.1g/4gを含有するセラ

チン中間層を塗布した。

第3層：感感性乳剤層

マゼンタカブラーとして、実施例-2で用いたカブラー-15gをトリタレジルフォスフェート15gと酢酸エチル45mlで溶解し、実施例-1と同様の方法で乳化物を得た。この乳化物を感感性汎臭化銀乳剤(6モル%の汎臭化銀を含有)1kgに添加し、硬膜剤を添加し塗布乾燥した。この時の塗布重量は20mg/4gで又カブラーモル/A_gモル=0.1であった。

第4層：保護層

セラチン0.5g/4gを含有するセラチン層を塗布した。

このようにして得られた試料を試料-(13)とし、試料-(13)の第3層のオイル成分中へ本発明の表示化合物(3)および(24)を添加し試料を(14)および(15)とした。試料(13)の第3層目のオイル成分中へ比較化合物(4)(5)を添加した試料を(16),(17)とした。

尚7g(感感性層のガンマーレ)が略して同一になるように現像抑制剤放出型化合物の添加量を調節した。このようにして得られた試料(13)~(17)を

表-6

試料 名	化 合 物	添 加 量 (モル/Agモル×100)	70.	IIE(%)
13	対照	—	1.80	5
14	例示化合物 3	0.4	0.80	20
15	例示化合物 24	0.4	0.83	19
16	比較化合物 A	2.0	0.80	10
17	比較化合物 B	0.6	0.78	18

表-6より本発明の化合物や比較化合物Bは比較化合物Aより、著しくIIEが強調され、本発明の効果が理解される。

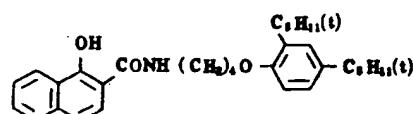
実施例-4

下記構造のシアンカブラー10gをトリクロレジル
オクスフェート10mlと酢酸エチル30mlに溶解し、
実施例-1と同様に分散し、同一のヘロゲン化銀
乳剤中へ添加し並布して得られた試料を(18)とした。

一方試料(18)の乳化分散物中へ本発明の化

(5)(9)を0.3モル/Agモル×100併用した試料を(19)(20)
として、実施例-1と同様に露光現像処理した結果、本発明の化合物を用いた試料(19)(20)は良好な階調調整効果を示した。

シアンカブラー構造



第1頁の続き

②発明者 植村盛人

日野市さくら町1番地小西六写
真工業株式会社内

②発明者 来住賢一

八王子市石川町2970番地小西六
写真工業株式会社内

手続補正

特開昭58-162949(19)

昭和58年6月20日

特許庁長官 若杉和夫 殿

1. 事件の表示

昭和57年特許願第 45809号

2. 発明の名称

ハロゲン化銀カラー写真感光材料

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 東京都新宿区西新宿1丁目26番2号

名称 (027) 小西六写真工業株式会社

代表取締役 川本信彦

4. 代理人

T 191

居所 東京都日野市さくら町1番地

小西六写真工業株式会社内

氏名 桑原義美

5. 補正命令の日付

(自記)

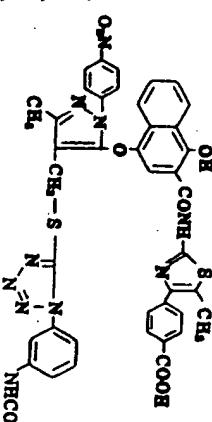
特許庁
58.6.22
出願第220

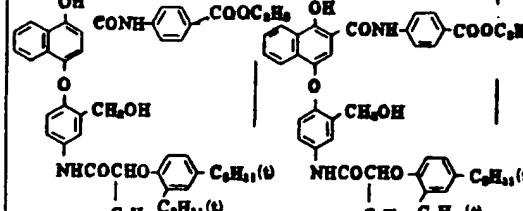
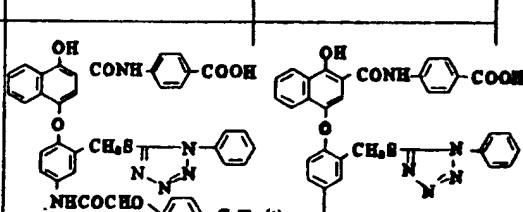
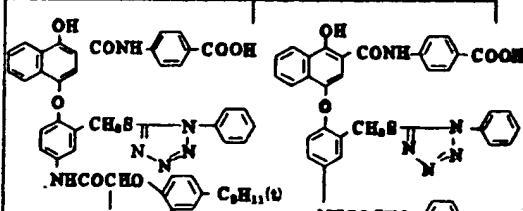
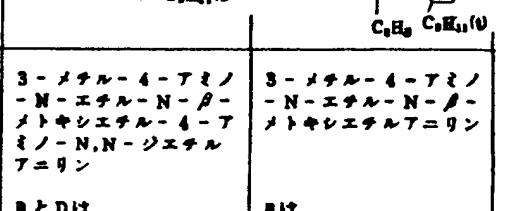
6. 補正の対象

明細書の「発明の詳細な説明」の欄

7. 補正の内容

(1) 発明の詳細な説明を次の如く補正する。

頁	行	補正前	補正後
10	10	スルホン	スルホニル基
12	7	ブレカーサー	ブレカーサー
21	例示11		

頁	行	補正前	補正後
36	①		
37	例示23		
48	5~7	3-メチル-4-アミノ-N-エチル-N-β-メトキシエチル-4-アミノ-N,N-ジエチルアニリン	3-メチル-4-アミノ-N-エチル-N-β-メトキシエチルアニリン
57	4	BとDは	Bは

頁	行	補正前	補正後												
63	第5表	<table border="1"> <tr> <td>10</td><td>比較化合物E</td></tr> <tr> <td>11</td><td>比較化合物F</td></tr> <tr> <td>12</td><td>比較化合物G</td></tr> </table>	10	比較化合物E	11	比較化合物F	12	比較化合物G	<table border="1"> <tr> <td>10</td><td>比較化合物D</td></tr> <tr> <td>11</td><td>比較化合物E</td></tr> <tr> <td>12</td><td>比較化合物F</td></tr> </table>	10	比較化合物D	11	比較化合物E	12	比較化合物F
10	比較化合物E														
11	比較化合物F														
12	比較化合物G														
10	比較化合物D														
11	比較化合物E														
12	比較化合物F														

昭 62.7.20 発行

手 続 判 定

特許法第17条の2の規定による補正の掲載

昭和 57 年特許願第 45809 号(特開 昭 58-162949 号, 昭和 58 年 9 月 27 日 発行 公開特許公報 58-1630 号掲載)について特許法第17条の2の規定による補正があつたので下記のとおり掲載する。 6 (2)

昭和 62 年 4 月 17 日

特許庁長官 岩

1. 事件の表示

昭和57年特許願第45809号

2. 発明の名称

ハロゲン化銀カラー写真感光材料

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住 所 東京都新宿区西新宿1丁目28番2号

名 称(127) 小西六写真工業株式会社

代表取締役 非 手 恵 生

連絡先

〒191

東京都日野市さくら町1番地

小西六写真工業株式会社(電話0425-83-1521)

特 許 部

4. 補正命令の日付

自 発

62.7.20

方 式

5. 補正の対象

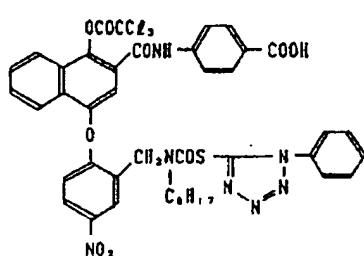
明細書の「発明の詳細な説明」の欄。

6. 補正の内容

明細書「発明の詳細な説明」の欄について下記のように訂正します。

1) 第29頁化合物34を次のように訂正

34



2) 第38頁第9行目

「300mlにつ」 → 「300mlにて」